

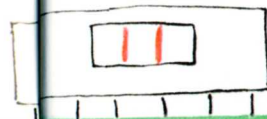
あの色／あの音／あの光



あの色  
あの音  
あの光

このポケット絵本は、小学生の子どもたちと美術館が3年にわたり交流する中から生まれました。彼らの実際の言葉と体験をもとに創作されています。子どもたちは美術館でさまざまな作品に会い、色、形、音、光を見つけ、時には絵の前に長く座り込み、浮かんだ言葉をつぎつぎに書きとめることもありました。最初の直感的な視点は美術館で過ごすうちに広がり深まり…、そして彼らが見つけ出したのは…。

学校の帰り道 ぼくらはここで池をながめていた。



この池の すぐ横の<sup>なてもの</sup>建物のことを知ったのは 2年前の夏。

「池は建物の中からも見ることができるよ」と教えてくれた人がいた。

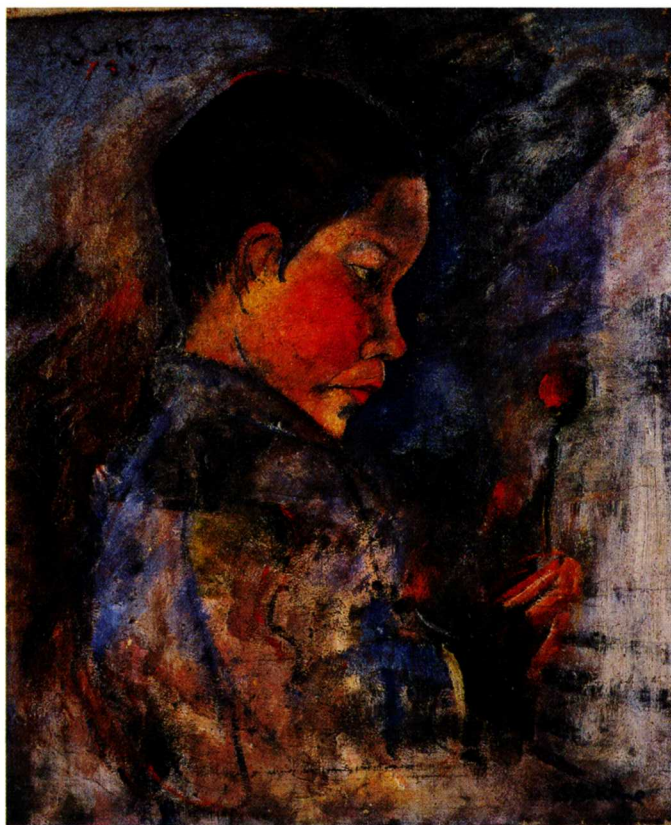
ぼくらは ずっと謎<sup>なぞ</sup>だった建物に 入ってみることにした。  
学校の帰りに より道をしてはダメって 言われていたけれど……。

中はうす暗く ほくらの探検する気分をもり上げた。

壁には絵 絵 絵。そして変わった彫刻。  
とにかく見なれないものがいっぱい。

「ねえ これ見て」

ほくらは ひとつひとつながめては  
ひそひそとおしゃべりをした。  
展示室には ほくらと 絵や彫刻たちの気配だけ。  
親も先生もいない じゃまされない時間。



関根正二[1899-1919]《少年》1917年作(寄託作品)

花をじっと見つめている。

なにか悩んでいるみたい。

ほくらと同じぐらいの年かな……。

暗い色が多くて 孤独な感じがするけれど、  
ほつぺたの色が赤くて いきいきしている。

今にも涙があふれてきそう……。

ねえ みて。

絵を描いた人はとても若かったんだ。





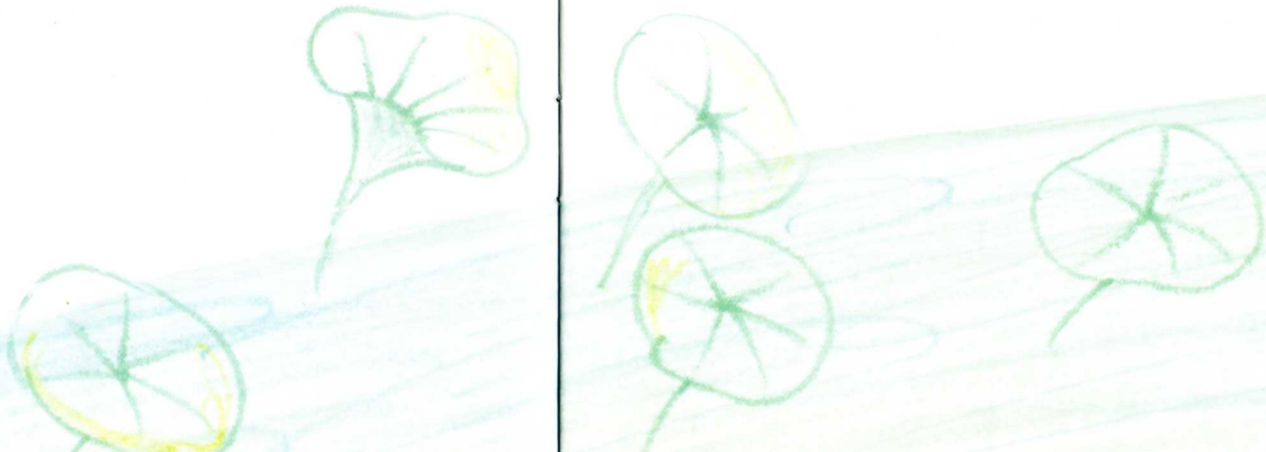
松本陽子[1936- ]《私的光景》2005年作

森の中？ 水の中？ 私の頭の中？

いろいろな種類の緑の線がうごめいて  
かたい木々のようにも見えるけれど  
やわらかい けむり にも見える。

すこしだけ甘い香りがしそう……。

あらし  
嵐の音が聞こえる。





田淵安一[1921-]《インディアン・サマーIV》1990年作

赤い花たちが 日当たりのいいところに  
移動している。

花は光をもとめて毎日 移動している。  
あそこは光がたくさんあるぞ ひっこしだー。

花のまわりにある 赤いもやもやは 花の匂いかな。

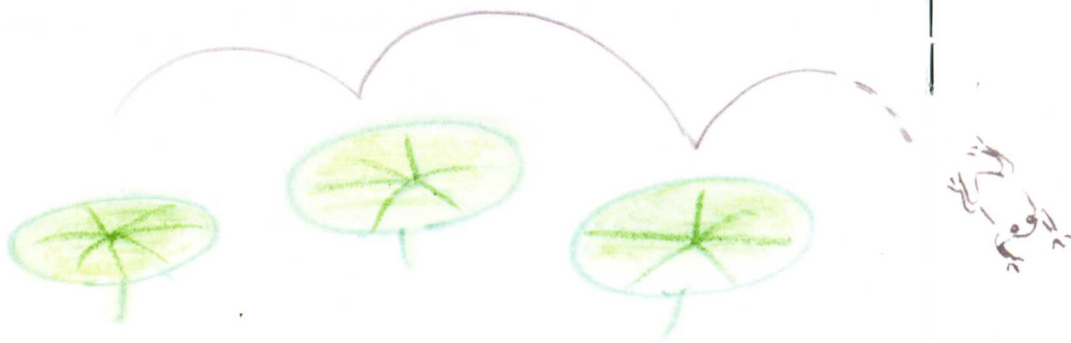
画面を2つに分けて描いているのは どうしてかな？  
左右が広い感じがする。



きっちりした黒い線と  
のんびりした色が リズミカル。

空間が重なりあってる 夢の中みたい。

トビアがハミングしながら歩いている。  
天使はほほえみながら聞いている。



村井正誠[1905-1999]《天使とトビア》1950/51年作

